



輝け！OKB517



471名+教職員46名

「褒めること」と「認めること」

校長 山本 邦彦

連日続いていた残暑もようやく収まり、朝晩は程よく涼しさを感じる季節となってきました。保護者及び地域の皆様には、日頃より本校の子供たちの健全育成のため、温かいご理解とご協力をいただき、心より感謝申し上げます。

給食時間の昼の放送中、職員室に近い1年生教室から子供たちの歓声が聞こえることがあります。それは、運営委員会が「キラキラボックス」に入れられた今日のスター（輝いていた人）を紹介する時です。「一人目のスターは、〇年〇〇さんからの紹介です。そのスターの名前は〇年〇〇さんです。けがをしている人に優しく声をかけていました。」「二人目のスターは・・・。」選ばれた5人の名前が紹介されるたびに歓声が上がります。内容は「落ちていた鉛筆を拾ってくれました。」「休み時間に一緒に遊んでくれました。」「隅々まで丁寧に掃除をしていました。」「登校した時、素敵な挨拶をしていました。」「学年のみんなが心を一つにして歌声を響かせていました。」など、学校生活のあらゆる場面で見付けた素敵な姿です。名前を呼ばれた子供は少し恥ずかしそうな表情を見せながらも笑顔が広がっています。給食後の「キラキラボックス」の前には子供たちが集まり、友達の素敵などを思い浮かべながらうれしそうに紹介カードを書き込んでいます。そんな毎日の様子を見てみると、私の気持ちも温かくなってきます。

文部科学省国立教育政策研究所の生徒指導リーフの中で、「褒めること」と「認めること」の違いについて以下のように記載されていました。

『大人が子供を「褒める」時は、一般に大人の基準や水準で「褒める」ことが多いように思われます。そして、大人側の基準で一定の水準に達した、水準を超えたと評価するのが「褒める」という行為と言えます。反対に言えば、水準に達しない場合には「頑張りなさい」と叱咤激励することはあっても、褒めることは稀でしょう。それに対して、子供が「認めてもらいたい」ときというのは、一般に子供の基準や水準で「褒められたい」のではないのでしょうか。子供なりのこだわりで努力したり工夫したりしたことを「褒められたい」のです。だから、大人の考えた基準に達していなくとも「褒めてほしい」と考えたり、大人の考えた水準に到達して「褒められた」場合でさえ、大人の基準とは異なる子供の基準でも「褒めてほしい」と考えたりするわけです。』

「キラキラボックス」で紹介される内容は、学校生活のあらゆる場面で子供たち自身が「すごいな」と思ったり、「うれしかった」と感謝したりした具体的な行動です。だからこそ、「褒められた」「認められた」ことが心に響き、それが「自己有用感」を育むことにつながります。子供たちが「こだわった」「見てほしかった」点に触れるためには、一人一人の様子をきちんと見て、具体的に返すことが大切です。日頃の教育活動において子供たちの素敵な姿に大いに携わり、「褒めて」「認めて」温かな気持ちを広めていきたいと思えます。